

研修報告 日本史サマーセミナー2023

明治大学大学院 矢野 暁

はじめに

8月24、25日にかけ横浜翠嵐高校を会場に日本史研究推進委員会による日本史サマーセミナーがおこなわれ、生徒、県内外教員、大学・教育関係者多数の参加を得た。全体テーマは、昨年に引き続き、「歴史総合」からどのように「日本史探究」へ接続していくかを意識し、『歴史総合』から『日本史探究へ』PartⅡと設定され、午前は高校生に向けた大学教員による講義、午後は実践報告・研究協議がおこなわれ、充実した2日間となった。

1 1日目の講義・協議内容について

1日目は、午前の部で、日本女子大学の成田龍一先生による「資本主義は、人間をどのように変えたか」、同じく日本女子大学の吉村雅美先生による『鎖国』から『開国』へ「何が鎖され、何が開かれたのか」の講義がおこなわれた。

成田先生の講義では、まず「資本主義はどのように理解されてきたか」と問いをなげかけ、19世紀中頃に描かれた「むちで打たれる児童労働者」を提示し、ベンジャミン・フランクリンの「13の徳」をもとに、生徒と資本主義を考えた。そして、マックス・ウェーバーの分析を検討したうえで、「ウェーバーの分析は、日本の資本主義に適用できるか」とし、二宮尊徳および「通俗道徳」へと接続し、さらには現在へと展開していった。「歴史総合」において重要な要素である「概念」をどのように学ぶか、「問い」をどのように広げていくかなどの課題に対する試みであり、「歴史総合」を考えるうえで示唆的な講義であった。

吉村先生の講義では、はじめに、「鎖国」という言葉の用いられ方を確認したうえで、出島オランダ商館を描いた「蘭船入港の図」を提示し、そこに描かれた人びとを手がかりに、「鎖国」イメージを見直す試みがなされた。そして、「鎖国」のありよう（どのように鎖されていたか／開かれていたか）、ジェンダーの問題、対外関係について、具体的な図像資料・文字資料をもとに説明がなされた。また、「鎖国」に関する研究状況にふれ、「日本史」と「世界史」の接続の重要性が述べられた。

午後の部は、まず、午前の講義のふりかえりがおこなわれ、その後、明治大学の伊勢弘志先生より史学史的な視点からの教科書分析についてご報告があり、研究協議がおこなわれた。

午前のふりかえりでは、講義の意図、感想がそれぞれ述べられた。成田先生は、講義の意図として、①「資料を入口にする」、②「概念をどのように考えるか」、③「入口の問いを、学習の過程を通じて出口の問いにしていく」、④「日本と世界を有機的に結びつける」の4点を挙げた。吉村先生も同様に、①「現代的な課題意識」、②「資料の活用」、③『近代』の捉え方、④「時代を通観する意識」の4点を念頭におき、講義を考えたとした。

研究協議では、特に「歴史総合」における「問い」や資料が論点となった。成田先生からは、学習指導要領における「私たち」と「問い」の関係について、その「問い」はどの段階で出すべき「問い」なのか（入口の問い、出口の問い、中間の問い）など、実践の蓄積に基づく新たな課題が提示された。また、資料については、丁寧で内在的な「読み解き」の重要性、歴史教育における蓄積の活用などが議論され、教室のなかで「歴史総合」をいかに練り上げていくか、現場の実践に対する期待があらためて述べられた。

2 2日目の講義・協議内容について

2日目は、午前の部で、法政大学の今泉裕美子先生による「太平洋島嶼から問い直すグローバル化」、信州大学の大串潤児先生による『満蒙開拓青少年義勇軍』論の講義がおこなわれた。

今泉先生の講義は、太平洋地域における「一体化」の問題（「つなげられる」と同時に「へだてられる」）から、「グローバル化と私たち」を考えるものであった。はじめに、2021年の「マゼラン上陸500周年」を手がかりに、グアム島の歴史と現状から「つなぐ海」という認識をみてとる。グアムにとって、強いられた「近代化」の遺産、そして「グローバル化」の現在もなお続く基地の問題は、日本にとっても深い関わりをもつことである。いま、日本に暮らす私たちの認識を問い直す、まさに「グローバル化と私たち」を考えるうえで重要となる視点と方法の提示がなされた。

大串先生の講義は、2枚の満蒙開拓青少年義勇軍の写真をあげたうえで、「君は満州へ行くか？」という生徒への問いかけからはじまった。そして、満州への動員のありよう、民族の問題がとりあげられ、ふたたび冒頭の「問い」が提示される。当時の若者（16歳～19歳）が経験した人生選択の問題を、歴史の条件に即して考えることで、いまの「私」と過去の「私」の異動、「戦時下どう生きるか」という問題へ発展していく。満蒙開拓青少年義勇軍を手がかりに、「大衆化」における「主体性」を考える興味深い講義であった。

午後の部は、午前の講義のふりかえりの後、横須賀大津高校の松木美加先生と横浜翠嵐高校の矢野慎一先生から、授業実践報告がおこなわれた。

午前のふりかえりでは、まず、今泉先生から、自身の研究姿勢をふまえ、国際関係史研究の現状、東アジアとオセアニアの双方向性の意識、無文字社会における記憶のありようなど、さまざまな論点が示された。大串先生からは、今回の講義を含めた「歴史総合」の年次計画構成の試みが提示された。また、「歴史総合」における生徒の「問い」の再構造化、「問い」の歴史化をあげ、「日本史探究」との接続の展望が述べられた。

その後、授業実践報告・研究協議がおこなわれた。松木先生の報告では、「歴史総合」および「世界史探究」の具体的な実践、単元構成の組み立てなどから、「歴史総合」から探究科目への接続のありかたについて論点提示がなされた。矢野先生の報告では、特に「歴史総合」における資料について、実際に授業で使用したプリントを例に、神奈川県資料を通史に位置づける試みが提示された。また、「概念」学習の重要性も指摘された。

研究協議では、特に「歴史総合」から「日本史探究」への接続について議論がなされた。そのなかで、成田先生からは、理念から実践の段階、つまり「歴史総合」・「日本史探究」の内実をつくっていく段階へ進展してきたとし、「歴史総合」を練り上げるなかで、発想をひろげ、探究科目へ接続していくとのまとめがあった。また、教科書について、大串先生からは、教科書に書いてあることは、教材ではあるが、教育内容ではない、教材を用いてどのような内容を教えるかは、教員にかかっているとの指摘がなされた。いずれも実践を鍛えていくことの指摘であり、改めてその重要性が認識された。

おわりに

「歴史総合」は2年目を迎え、克服すべき課題はありつつも、それを共有することで、内実を深めつつあることがみてとれた。「歴史総合」および「日本史探究」の今後に向けて、一人ひとりの教員のさらなる授業実践の積み重ねとともに、本セミナーのように、大学教員と高校現場の教員との共有・議論の場を継続していくことが重要だと考える。